

「日本の若者は…」

福岡県立八女高等学校 2年

岡 春菜子さん

積極性やコミュニケーション力が足りない、規範意識が低い、夢やビジョンがない、といういろいろな批判をされるのが近頃の若者で、私もその中の一人だ。いつの間にか自分の中に外国の同世代の人に対する劣等感を抱くようになっていた。

そんな私が、外国に滞在する機会を持った。一度は二年前の三週間のイギリスでのキャンプ。十カ国以上の国籍を持つ同世代の人々が集い、自分の国こと、将来のこと、毎日行うイベントの企画について話し合う機会があった。私の英語力の問題もあったが日本人である私は他国の子たちに圧倒され、「ああ、これがよくいう日本の子どもの消極性か」と思ったものだ。また今夏は、オーストラリアに二週間滞在し、現地の学校に通い、授業を受けながらホームステイをして異文化交流をするという機会を得た。子どもに家事分担が厳格に行われ、節水のためシャワー時間も制限されていると事前に聞き、やはりこの時も日本と違って子どもをきちんとしつける文化があるんだと、緊張感を持って出国した。交流先の学校でバディになったジャスミンは、先生方にも自分の思ったことを率直に伝え、何をするにも堂々と振る舞っていて「すごい。イメージ通りの外国人だ」と思った。

しかし一方で、私はこの二度の体験から、日本文化の良さも実感した。焼いただけの肉、ブロック状のチーズ、丸ごとの果物をドーンと出して、さあ食べましようというイギリスの食文化にはま

驚いた。多国籍キャンプで子どもたちを受け入れるプログラムには食に関する配慮というものは全く欠けていた。様々な調味料を駆使し、切り方を工夫し、時間をかけて丁寧にご飯をつくる文化には、日本人のキメ細やかさが表われていると実感できた。

またオーストラリアで驚いたことは教育だ。子どもは家庭内ではメディア漬け。清涼飲料水もスナック菓子も自分の好きな時に好きなだけ摂る。掃除、洗濯などの家事も最低限の回数で、要するに家庭内で自分のノルマを厳格に果たせばよく、家を整えることで家族の気持ちは一つにしようという哲学的な目的は毛頭ない。自動車運転も荒く道の真中には日本人の私からみれば希少なカンガルーが車にはねられているのを毎日見なければならぬ悲しさがあった。学校の授業でも、とても規律があるとはいえず驚きの連続だった。何にでも当てはまる印象、それは「大雑把」ということだ。

これらの体験を経て、日本の文化や社会は思っていた程悪くはなく、そこで教育を受ける私は、外国の同世代に様々な点で劣っているとは思わなくなった。むしろ、勤勉で誠実で相手の立場を深く考えているという点では、コミュニケーション力にも優れているのではないかと思う程だ。今年訪問した神戸大学国際文化科では「日本の英語の授業法が文法主義に偏っていてよくないとやり玉に挙げられるが、決してそうではない。早くから適当にしゃべっている海外の子どものもそれよりも文法の基礎を厳格に身につけた日本人の英語力の方が国際舞台の中ではより重要で役立つ」という頼もしい話も聴いた。今の私は親や学校の先生をはじめとする大人たちから、多くの制限を与えられていると感じること

もある。でも私も親になればおそらく、似たような方法で子ども世代を育てるだろう。

「制限の文化」は自分で考えて行動できる人間になるための大切な日本の教育のやり方だと思う。実際に海外の様子を垣間見た私からすれば優れた独自性のある方法だと思う。

私が消極的なのは遠慮深さと慎み深さの表れ。なりふり構わず行動しないのは、周りの様子をよく見てからという深いコミュニケーション力の裏返し。規範意識や、真面目さは他国の誰にも劣ってはいない。きちんとした語学力の基礎と、ものを考え続けるしつかりした力を身につけて、国際社会に出て行こうと思う。

個人部門

優秀賞

「天からのプレゼント」

佐賀県東明館高等学校 1年

手嶋 拓耶さん

小学校五年生の時、突然、右足に痛みが走り、歩くことはもとより立っていることも出来なくなってしまう。突然襲ってきた激痛に私も母も狼狽し、苦痛で顔をゆがめる私を背負って、母は色々な病院を回った。しかし、どの病院でも原因が分からず、検査と薬で様子を見るだけの治療で終わるのだった。中には「他の病院を紹介します」と無碍に治療を断る病院もあった。私は原因不明の病気に不安が募り、また定期的に襲ってくる痛みの恐怖で苛つき、あまりの激痛に耐えられず、足を切り取ってほしいと言って、母を困らせたこともあった。今思えば、母に与えた苦悩が如何ばかりであ

ったろうと、自分の至らなさを悔やんでしまう。

それでも、病院に通えば治るだろうと思いつながら入院を繰り返し、多くの薬も服用した。ところが、治るところか健康だった左足までもが痛みと共に腫れあがり、杖がなければ生活できないようになってしまった。不慣れた杖を使っての歩行は難しく、前からベビーカーを押した母子がやって来てもうまく避けることができず、いつも母が私を支えてくれていた。歩くこともできず、身の回りのこともできない。そんな自分の心が、どんどん荒んでいくのを感じた。

ある日、母は私を鹿児島県の病院へ連れていった。「どうせまた『原因不明です』と言われるだけだろう」とあまり期待しないで診察室に入った。ところが、担当になるT先生は各種の検査結果を観ながら、「この症例は世界に例がないがリンパ系の損傷が原因だろうと私は考えています。諦めずに頑張りましょう。私も全力で調べて治療にあたります」と勇気づけてくれた。思いがけない「頑張りましょう」の言葉に「自分のことを考えてくれている。本気で病気を治そうとしてくれている」ということを強く感じることができた。

T先生とのこの出会いで気持ちが安らぎ、生きて行く希望が湧いてくるのを感じた。そして現実を受け入れることに加え、出来る事と出来ない事を割り切ることの大切さにも気づくことができるようになった。原因不明の病気は、最先端の医療知識や技術を身に付けた医師でも簡単に治療できない。だから私は、この事実を冷静に受け止めて病気と闘うことが大切だと思えるようになった。病気に対する考え方を変えた時、この病気は私へのプレゼントなのではない

かと思えるようになった。最も喜べない、そして最も受け取りたくなかったプレゼントではあるが、この病気に出会ったことで色々なものが見えるようになったからだ。

世の中には、目や耳が不自由な人や手足に障害の人たちなど、さまざまな病気や障害を持った人たちが存在し、バリアフリーが叫ばれて、公共施設や交通機関など、ひと昔前と比較すると大きく改善されていると思う。しかし、障害者に優しい施設や機器などのハード面の進歩に比べて、ソフト面である人の心、障害者を尊重し思い遣る心は開けて行っているのか心もとない。

私の主治医であるT先生は、患者の治療にあたるかたわら、病気や障害で苦しむ人々を救済するために、日本ばかりでなく海外でも講演を行っている。

私も将来、T先生のように、治療を受ける患者さん達に同じ目線で病気への対処を考えながら、勇気と希望を与えられる医師になりたい。医師の方からの一方的な治療ばかりでなく、病気にかかって苦しむ人の立場、そしてその患者のために心を傷める家族の立場で、決して諦めることなく治療を行いたいと思う。また、病気や障害を持つ人々が苦しむ、もう一つの見えない苦痛、つまり人々の不意な言動が少しでもなくなるように、優しい社会を創る講演活動を行いながら、人々に労りの心の大切さを伝えていきたいと考える。

世界でも「特異な病気」というプレゼントは、私に不安と苦痛を与えたが、同時に生きる目標と私を見守ってくれる人々の存在の大切さを教えてくれた。

いつまた病魔が再び襲ってくるのか分からない身体だが、例えどんなに苦しんでも、今までのように苛立ち、途方に

くれるのでなく、私を思い遣ってくれる人々の温かい心を忘れずにしっかりと目標に向かって、前進していきたいと思う。

個人部門

審査委員特別賞

「自分が日中の架け橋に」

東京都 早稲田大学高等学院2年

松村健太郎さん

私にとって語学とは、自分が学び、吸収する対象であった。それは私にとっての語学が、英語など日本語以外の言語であるからだ。私はずっと、自分は語学で学ぶだけの立場にいるものだと思っていた。そこに新しい視点が加わったのは、中学校三年生の頃だ。私は友人たちと共に、中国の大学生たちに教科書を贈るボランティア活動をした。送ったのは国語の教科書。彼らは日本語の勉強をしていたのだ。

私たちが国語として勉強している日本語を、彼らは外国語として勉強している。当たり前と言えば当たり前だが、日本語も日本人以外の人々にとっては語学の一つである。私はそれまで、そのことをほとんど意識していなかった。「彼らにとって、語学とは日本語である」これは私にとって新鮮な発見だった。

そして今年の春休み、私は中国の大連にその大学生たちを訪ね、彼らの勉強の様子を間近で見た。大学に日本語のネイティブスピーカー（これも新鮮な響きを感じる言葉だ）はほとんどいないので、私はとても貴重な存在だったようだ。彼らは一言一句さえも聞き洩らすまいという感じで、熱心に私の話す日本語に耳

を傾けていた。私が語学を学んでいる時の姿勢と比べると、かなり積極的だ。私は「自分も、もつと勉強しなくては」と強い刺激を受けた。また同時に、自分のいる立場についても考えた。

私は日本では、教師が提供してくれる語学の知識をただひたすら吸収する立場にいる。しかし中国のこの大学では、正反対の立場にいるのだ。私は、自分が語学を学んでいる時の気持ちを想像してみた。それは「どんなに些細なことでもいいから、できるだけ多くのことを教えて欲しい」ということだ。他の言語を学ぶことは、未開の領域に踏み込んでいくのと同じで、大きな不安や苦痛を伴う。語学の勉強に行き詰った時、私は藁にもすがる思いで問題解決の糸口を探る。とにかく、何か取っ掛かりが欲しいのだ。自分と同じように語学を学んでいる大学生たちも、似た気持ちを感じることもあるはずだ。使い慣れない言語を学ぶことの大変さはよくわかる。私は、彼らにより親しみを持って日本語学習に取り組めるように、少しでも彼らの力になりたいと思った。そして、一人でも多くの人に日本をもつと知ってほしい、と思うようになった。

そこで始めたのが、学生との日本語メールの交換だ。内容はその季節に合った日本の文化や、私の近況など。さらに、まだ日本へ来たことのない彼らのために日本の写真を添付している。返信で、彼らが中国の文化を教えてくれたりすることもあつて、メール交換は互いに新鮮な発見に満ちている。

私はこれらの体験を通じて、日中の学生たちの架け橋になりたいという志を持つようになった。私は中国へ行く前、中国の人々、特に若い世代は日本人に冷淡だと思っていた。ところが行ってみる

と、会う人すべてが私を歓迎してくれて感激した。メディアなどで報道されることだけを信じて、お互いに感情がすれ違っている部分があると感じた。だから、実際に中国で中国の人々と交流してきた人間として、このすれ違いを修正したいのだ。

私が交流し、日本語知識を提供しているのは、ほんの数人にすぎない。いわば、私たちのつながりはまだ一本の細い糸のようなものだ。しかし、細い糸は紡がれて縄となり、それがさらに紡がれていって、太い綱になる。このような小さな交流でも、やがては大きなつながりを生むかもしれない。とにかくどんなに些細なことでも、やってみなければ何も始まらないのだ。――小さなことでも、自分のできる限りを――私はこの言葉をモットーに、志の達成に向けてこれからも交流を続けていきたい。

個人部門

審査委員特別賞

「日本の心を受け継ぐ」

福岡県立大牟田北高等学校3年

永井 靖久さん

私は将来、神職として神社を継ごうと考えています。私の祖父が宮司をしている神社は八二三年の歴史があり、父で十七代目、私は十八代目の宮司となります。神社の正式名は宇佐八幡神社といいますが、大分県の宇佐市にある宇佐八幡神社と同じく「八幡様」と呼ばれる神社です。この江浦宇佐八幡神社には古くから「粥占い」という、神事があります。毎年二月に、前年秋に収穫された新米を粥にして神殿に安置し、一カ月後にカビの色、

形、広がり方を見て、その年の、天候と作柄を占うのです。藩政時代には、柳川藩に報告されていました。粥を開いて占う日の午後に地元の小学生たちによる奉納相撲大会が行われ、私も小学生の時には参加していました。

私が、神社を受け継ぎたいと思った理由は、この歴史ある神社の伝統を守り、さらに祭りや行事を通じて、より活気ある町づくりをしていきたいと思ったからです。

そんな私も、小・中学生の頃までは、神社を受け継ぐ気は、まったくありませんでした。しかしある日、祖父が「いいものを見せてやろうか」と言って、五代目が見せたというぶ厚い巻物を見せてくれました。達筆で、神社の歴史が書いてあり、私には、何と書いてあるのか意味は分かりませんが、とても長いものでした。また、その後、見せてもらった家紋や刀は、私を遠い歴史の中に引き込んでしまいました。それからというもの、私は、日本の歴史にも興味を持つようになり、日本史の勉強も意欲的にするようになりました。

祖父は八十四才ですが、今でも夜遅くまでかかっても、自分で考えた祝詞を筆で書き、お祭りのお祓いの準備をします。一年の間には、人間にとって大切な農業が順調に進むよう祈願のためのお祭りがいくつもあります。虫祈禱や夏祈禱と呼ばれる祭祀です。また、年の初め、月の初めなどにも歳旦祭と呼ばれる祭祀をします。赤ちゃんのお宮参りや自動車のお祓いも時々あります。

私は、その様子を見ながら育ちました。そして、だんだんと神職という仕事について考えるようになったのです。お宮に来られた人たちは、お祓いが済むと穏やかな顔になり、祖父と笑顔で話をして、

帰っていきます。農家の人々の稲作の収穫の無事、赤ちゃんの健やかな成長、交通の安全。このような人々の願いを祭祀という形で行うのが神職という仕事なのです。だから祭祀が終わると人々は、安心した顔をするのだと考えるようになりました。

「鎮守の森」という言葉があります。昔から神社は、村を守る森でした。人々の願いを受けとめ、平和に過ごせるよう人々を見守る森です。神職は、そういう大切な仕事をしているのです。

近年、子どもが減り、行事や祭りに昔のような活気がなくなってきました。私は、神社がもつと地域の人たちの交流の場になり、これからも祭りや行事が活発に行われるようにしたいと強く思うようになりました。

私は、進学先として、皇學館大学を選び、入試のために、神社新報を読みました。その中に印象に残る記事がありました。それは、歴史的仮名遣いに関することです。この記事を読んで、私は、日本古来の言葉や文章にも興味を持ちました。そして、その大切さに気付くことができました。

大学には無事、合格することができました。祖父を初め、家族みんなが喜んでくれました。私も今、来年の四月からの生活を楽しみにしています。四年間、伊勢神宮のそばで過ごします。神社について、多くのことを学んで帰ってきたいと思っています。そして、みやま市の無形文化財である「粥占い」を大切に受け継ぎ、日本人の心のよりどころ、「鎮守の森」の宮司になりたいと思っています。

グループ部門

優秀賞

「二十一世紀は

海が世界を変える時代」

長崎県立猶興館高校 1年

久原 里菜さん 曾川 紗希さん

関 修平さん 鈴木 悠斗さん

一・活動の動機

私たちが通う猶興館高校は海にとっても近く、毎日とっていいほど海を見ている。しかし、だからと言って海に住む生物、海の利用方法、海の抱える諸問題などを深く考えることはあまりなかった。身近なはずの海について詳しく知らないということに気づいた。

しかし、私たちが暮らす日本は、海に囲まれている。海には多種多様な生物が生息しており、膨大な量の資源や恵みを私たちに与えてくれる。昔から海は私たちの生活にとってかけがえのない存在である。身近な海について知識や理解を深めることで、海が持つ豊富な資源をより良く活用できるようにするはずだと考えた

なぜ、私たちがこんなに海について興味を持ったのか、それは海についてのあつる興味深い話を聞いたからである。その内容は、「海には豊富なエネルギーがさまざまな形で蓄えられており、それは化石燃料に代わる環境にやさしいエネルギーとなる。つまり、海のエネルギーを利用することで環境問題が解決できるのではないだろうか、また、海を利用することで世界に良い影響をあたえるのではないだろうか」というものであつた。そこで私たち猶興館理科1年生は、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトを利用し、実験・観察をとおして海

洋エネルギーの利用や海洋生物について学び、海を知ることによって海洋利用社会について考えを深めた。

二・受身の漁業

日本人は昔から魚を食してきた。刺身や寿司のような生で魚を食べるといふ日本独特の食文化があるように、魚は日本人にとって大変身近な食材である。現在、その文化が世界中に広まり、魚の需要が増えた。そのため、近年魚が減少するという問題が起こっている。

そこで私たちは、長崎大学の山口教授らと連携して定置網漁業の体験をし、漁獲した魚の分類や形態観察を行い、魚についての理解を深めた。まず、定置網の分類や構造について学習した。定置網漁業とは、代表的な沿岸漁業の一つである。壁にそって泳ぐ魚とする魚の行動習性から、移動する魚群を網の罫いの中に誘い込んで漁獲するという漁法で、受身の漁業としても知られている。そのため、餌を用いずに漁獲できる、魚群を根こそぎ獲らないので生態系への影響が少ない、魚を傷つけずに漁獲できるといふ利点を持っている。網を仕掛ける際には、目的の魚がエサを求め、あるいは産卵のためにどの時期に、どの場所を選んで泳ぐかという魚の習慣を知り、潮の流れを読んで網を仕掛けることが大切である。定置網には魚群の移動を遮って網内へ誘導する「垣網」、入った魚群を網の奥へ迷い込ませて滞留させる「身網」の二種類の網が使われている。しかし、網の欠点として、付着する生物やごみなどによって網目がふさがれるという問題があり、これから解決策を考えていかなければならないということであつた。

私たちは、解剖班と付着生物班に分かれて活動した。解剖班では定置網で漁獲

された魚を解剖し形態観察を行った。結果として、食性によって体や内臓のつくりが異なることが分かった。付着生物班では、網目の大きさ、網を沈めている期間、基板の違い等で付着生物の生息密度や組成の違いがあるかを検証した。結果として、表層の付着生物の方が深層の付着生物より比較的大きいことなどが分かった。今回いろいろ魚について理解を深めたことで魚を食物としてだけではなく、生物として興味を持つことができた。

三．縁の下の力持ち（干潟）

さらに私たちは、生物が多く生息している干潟に魚の減少・海の環境問題の解決策のヒントがあるのではないだろうかと思ひ調べてみた。長崎県佐世保市の水族館（海きらら）と連携して干潟の特徴や役割、干潟に生息する生物などについて学習した。実際に干潟の環境を体験することで、干潟に関する知識や保全意識を高めた。

まずは、干潟についてのさまざまな知識や考え方を学んだ。干潟とは、干潮時に沿岸域に現れる砂や泥がたまつた場所、内湾や入江など外海の波の影響が少なく、河川が流れ込み砂や泥を運んでくる場所にできる。特徴としては、①渡り鳥の中継地や生物生産地となる。②生物群による水質浄化作用がある。③マンガローブなどの植生の場となる。など多くの利点を持つている。また、津波災害が軽減され、バードウォッチングや潮干狩りの散策の場として利用されるなど、人間にとつても重要な場所である。

今回、長崎県平戸市にある若宮浦へ行って実際に干潟へと足を踏み入れた。干潟や海辺にいる生物を探し、海きららの方から干潟に生息する生物の説明を聞

くといい、貴重な体験をした。見つけた生物の中には、絶滅危惧種であるカブトガニも含まれていた。干潟には多種多様な生物がたくさん生息していることは知っていたが、実際に行ってみると想像よりも多くの生物が生息していた。このような生物にとつて素晴らしい環境が、故郷平戸にあるということが大変誇りに思った。

活動中の気づきとして、干潟のにおいがしなかったこと、干潮時と満潮時とでの生物の行動の違いがあつたことなど多く挙げられた。それに対して海きららの方が丁寧に解説してくださつた。干潟のにおいの原因は硫化水素であるが、水が循環している上層ではにおいはしない。ただ、汚れた干潟では上層でもにおいがする。また、生物の行動の違いは、干潮時に生物は姿を現すが、満潮時には巣や石の裏に潜んでいるとのことだった。

近年、各地の干潟は工業用地や農用地の造成のため開拓され、減少傾向にある。西日本で近年失われて干潟として、九州・有明海の諫早湾の干潟が挙げられる。今後消えそうな干潟も存在する今日、私たちは多くの恵みを与える干潟の保全にも努めなければならぬのだと感じた。海と切つても切り離せない干潟を守ることが海の環境を守ることにもつながるので。

四．海の温度差を利用して

次に、エネルギー面での海洋利用法について調べた。現在、クリーンな発電方法として注目されている海洋温度差発電について佐賀大学の池上教授らと連携して学習した。

海洋温度差発電とは表層の温海水と深層の冷海水の15度から25度程度の

温度差を利用して蒸気を作り、タービンを回して発電するという火力発電と同じ仕組みである。しかし火力発電では蒸気を作るのに水を使用するところを、海洋温度差発電では水の代わりにアンモニアを使用する。水よりも沸点の低い、沸点マイナス33度のアンモニアを使用することで、小さな温度差でも発電が可能になる。また気圧を高くすると液体の沸点が上がることを利用して、さらにアンモニアの沸点を上げる工夫が施されている。この発電では電気を作り出すだけでなく、水素の製造、海水の淡水化などのメリットがあることがわかった。

次に、佐賀県の海洋エネルギー研究センターを見学し、実際に海洋温度差発電で発電されることや、水素の製造などを模型で確認した。

海洋温度差発電はメリットが多く、有害物質も出さないので、地球温暖化や環境汚染などの深刻な問題を抱えるこれからの地球環境にとつてとても重要だと思う。

五．未来の海洋エネルギー

また、温度差発電とは別の海洋エネルギーを利用した発電方法について調べた。

九州大学の経塚教授と連携して潮流発電の学習を行った。まず、講義をうけ潮流発電の仕組みについて学んだ。潮流発電とは、潮の満ち引き（潮汐）を利用した発電方法で、自然地形を活かしたものである。潮汐とは天体、特に月や太陽と地球の間にはたらく力によつて、海水が引きずられて起きる現象である。潮流発電の原理は風力発電と同じであるが、違いは、潮流発電は潮汐によつて駆動されるので潮汐の状態によつて決まることである。潮汐は規則的であり、予測可

能である。潮位差が大きい場所ほど潮流発電の適地になりうる。また、潮位差自体が小さくても流れが速いところは適地となりうる。よつて、潮流発電の適地は世界中にあるといつても過言ではない。また、潮流発電は橋脚の下などに設置することがポイントだ。理由は、流れの増速効果や発電した電力を送電しやすいなどの利点があるからである。

潮流発電はまだまだ開発が進んでいく発電方法であると感じた。自然を利用して発電するため、安定性などに問題がある。こうしたことを改善していくことが今後の課題となる。

六．海が世界を変える

今回の活動で、身近な海に触れ、多くの貴重な体験をすることで新しい知識を学び、自らさまざまな問題点について考えることができた。そのなかで、現在懸念されている生態系の破壊や地球温暖化、大気汚染などの地球環境問題は海を有効利用することで解決できると考える。例えば、海洋温度差発電や潮流発電等の海洋エネルギーを利用した発電は、クリーンで環境にやさしく、大気汚染や地球温暖化の解決に少なからずつながる。また、海は利用するだけでなく守るべき存在でもある。魚の減少に対して私たちは考えたり、干潟の保全に努めたりすべきである。私たちは、次のことを提案したい。まず、近年問題視されている海洋資源の減少に注目し、今後は資源には限りがあることを世界規模で認識する必要があること。次に、海洋や太陽光などの自然エネルギーを利用したクリーンな発電方法の利用地域の拡大や、発電量の安定性の問題などに力を入れていくべきだということ。そして、海を守ること。これらの提案はその原点で

ある地球にとって、人類にとって重要視されることのひとつであると私たちは考える。

私たちは学び・考えることを止めてはならない。

将来の環境・生活を決めるのは私たち、つまり次世代の科学者なのだから…。

グループ部門
審査委員特別賞

「私たちのフェアトレード」

山口県立厚狭高校 1年

三隅 遥さん 柴川佳奈子さん

村上 舞さん

【はじめに】

毎日三度の食事をする。高校に通い勉強や部活動に励む。それは普通のことだと私たちは思っていた。しかし、世界人口約六十数億人のうち、今なお、10億人の人々が貧困に苦しんでいるといわれている。

フィリピンの首都マニラの東南にある小さな島の貧困地区ペレーズに暮らす人々は、私たち厚狭高校新聞部の友人である。私たちが六年前からさまざまな形で支援を続け友情を培ってきた。しかし、彼らの生活はこの六年間、全く向上していない。十五km×五kmの狭い土地に、約一万人もが暮らしている。その約半分が、四大家族で日本円にして月額約六千円から七千円の収入しかない貧困家庭である。職業は自分の土地を持たないココナツ小作農民で、収入の六割を地主に収めねばならない。しかも、ココナツの仕事は季節労働であり、収入が極端に少ない時期もあるという。そのため、三度の食事のままならず、食事内容はご飯と塩だけというのが普通なのだそう。まして、子どもに教育を受けさせる余裕などない。教育は貧困克服の最大の鍵である。しかし、ペレーズでは、そのことも機能せず、貧困の再生産になかなか歯止めがかからない。

私たちは、同じ時代、同じ地球に生きる仲間の五分の一が貧しい生活をしていることに目を背けてはならないと考える。私たちにできることは限られてい

るが、それでも何もしいよりは、何かをすることにより、少しは前進できると考えている。

【私たちの支援】

私たちは、ペレーズに支援を続けてきた。特に力を入れていることは、教育への支援である。貧困克服の第一歩は子どもたちが教育を受ける機会を増やすことである。フィリピンでは、無償の義務教育を受ける前に、有償の未就学児教育を受けなければならない。しかし、これが貧困のため受けられず、教育の第一歩が踏み出せない子どもが多くいる。そこで、私たちは、ボランティアが設立した未就学児教育施設に教科書や給食費を支援するという活動が続けてきた。更に、子どもたちに英訳した絵本や洋書などを贈る活動が続けてきた。送った本は、現在、ペレーズの人々がみんなで読める巡回図書館として活用してもらっているという。この活動を通して、ペレーズの人々は、私たちを「友だち」と呼んでくださっている。私たちにとってもペレーズの人々は大事な友だちだ。「友だちが困っているからお手伝いをする」というのが、私たちが先輩から引き継いできた私たちの支援の根幹だ。「フェア」という言葉は私たちの支援活動にとって大切なキーワードなのだ。

【フェアトレードとは】

そのような中で、私たちが出会った言葉と活動が「フェアトレード」だった。フェアトレードとは、発展途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続的に取り引きすることによって、生産者の継続的な生活向上を支える仕組みである。一方的な資金援助は、援助する側の都合によって左右され、継続性に欠ける

という問題点がある。フェアトレードは消費者が自分の気に入った商品を購入することができる国際協力の形だ。この方法であれば、無理なく継続的に行うことができる。募金活動と異なるところは「与える側」と「与えられる側」という主従の関係がないことだ。フェアトレードは商品取引を通して「売る側」と「買う側」という平等な関係が成立する。よりよい製品を開発して販売することによって、現地の生産者団体はよりたくさんのお金を得る。貧しい人たちの生活を安定させることができ、生産者も自尊心を持つて働くことができる。支援に頼らない自立した生活は、貧困脱出の可能性を秘めている。

【私たちのフェアトレード】

私たちも、ペレーズの住民の方たちやフィリピンの貧困に苦しむ方たちの、経済的自立をお手伝いしたいと考えた。ペレーズでは、ココナツ小作農民が新たな収入を得る方法として、ココナツヤシの殻を使った小物作りを行っている。これは、日本のボランティアが日本で売れそうな小物作りを指導し、それを日本で販売し、ボランティアの団体も活動費のための利益を得る形のフェアトレードとして行われている。フィリピンのマニラのスラム街でも、自立のために、グリーンディングカード作りが行われフェアトレードが行われている。そこで、私たちは、ペレーズのココナツヤシ殻の小物やマニラのスラム街のグリーンディングカードを仕入れて販売するフェアトレードを行うことにした。

私たち厚狭高校新聞部が最初に取り組んだフェアトレードは文化祭での販売だった。私たちは利益を得る必要がないので、売上金をすべて送ったが、決し

て十分な金額ではない。

昨年の文化祭終了後、私たちは、フェアトレードについて再考した。文化祭などの行事だけで販売しては、継続性も安定性もなく、あまり、経済的なお手伝いにはならないのではないかという結論に至った。そこで、何とか継続的なフェアトレードの取り組みをしたいと考えるようになり、そこで、地域の祭、小学校のイベントなどにも出向いて販売したが、それでも、非定期的な販売にしかない。私たちは、ペレーズやマニラの生産者が少しでも安定した収入が得られるようにしたいと考え、恒常的な販売を目指すことにした。今までは、仕入れた商品について、売れた金額のみを送っていた。多くのボランティアが行っている従来の方式である。しかし、それでは生産者にとって安定した収入にならない。そこで私たちは、仕入れた商品の金額は全額入荷時に支払うことにした。この資金は私たちが活動を報告することでいただいた奨学金を活用した。また、私たちは金銭的利益を得る必要がないため、販売価格は仕入れ価格のまま販売した。その結果、同じ商品が他の場所での販売価格の半額から三分の二程度になり、数多く販売することができた。

また、今年四月から約一ヶ月をかけて、フェアトレード商品のカタログ作りに取り組んだ。商品の写真と価格、簡単な商品説明を入れ、カタログの最終ページには、フェアトレードの説明や商品購入の持つ意味の解説も入れた。そして、これらを恒常的に販売可能な場所、本校の図書館や事務室、公立図書館に設置していただいた。さらに、テレビや雑誌で話題になっている雑貨屋さん、カタログを置いていただくこと、商品販売をして

いただくことをお願いしたところ、利潤なしで引き受けてくださった。その上、お店のブログでも紹介してくださった。

私たちの大きな目的は、フェアトレードを通して、世界の貧困について、また、ペレーズについて知っていただくことである。その方法の一つとしてフェアトレード商品に、「ラベル」をつける活動がある。最初にオランダ人のボランティアが考案した方法だそう。その役割は多くの人に「フェアトレード」という存在を知ってもらうことと「フェアトレード」の商品と分かってもらい、なおかつ証明することである。

私たちの仕入れた商品にも、英語のラベルが入っているが、さらに、私たちは、日本語でフェアトレードの主旨を説明する紙を一つ一つの商品に手作りして入れている。フェアトレードの説明や「この商品を購入することにより、フィリピンの貧しい子どもたちのお母さんが子どもたちに一キロのお米を買うことができます」という具体的説明を入れている。このことにより、多くの人が貧困についての理解を深め、国際理解や国際協力にもつながると考えている。

【私たちの課題】

まず、フェアトレードを知ってもらう機会をもっと多くし、世界の貧困と向き合ってくださいる方々を増やしたいと思う。今年の文化祭ではヤシの実の殻で作ったサンダルのキーホルダーが完成した。手作りグリーンディングカードでは、立体的なバスデーケーキがあらわれているカードが人気だった。これら、日本のニーズをフィリピンに伝えていくことにより売上アップを目指したい。そしてまた、フェアトレードを続けるためにさまざまな工夫もしていこうと考

えている。今、私たちは、商品を送ってもらっただけでなく、日本でのニーズを考え、私たちの感性を反映した商品デザインの提案もしている。また、ヤシの実の殻で作ったキーホルダーのストラップ部分を、私たちが日本で付けることも提案した。ストラップ部分を遠くの町まで購入にいかねければならず、そのためにお金がかかってしまうと聞いたからだ。私たちのフェアトレードは、お互いの友情と思いやりに支えられている。ペレーズの人々と、私たちの協同作品を販売することを楽しみに前進したい。

私たちは、フェアトレードを通して、更にペレーズの人々とのつながりや信頼が強くなった。「高校生として、多くのことを学び、経験ができたこと」「海をこえたたくさんの友人ができたこと」「国内でも私たちの活動を理解し、支えて応援してくださいる方々がおられること」。これらがフェアトレードによる私たちの最大の収益だ。「あなたたちが、ペレーズの自然の材料で作った私たちの作品を買ってくださいたら、貧しい私たちへの大きな助けになります。私たちはみなさんにすてきと言ってもらえる商品づくりを目指します」先日ペレーズから届いた手紙の一節が私たちの活動を支えてくれる。

私たち厚狭高校新聞部は、小さなグループだ。その私たちはフィリピンの小さな貧困地域ペレーズの人々のお手伝いをしていく。そのことをさまざまな場や手段で多くの人々に伝え、それを聞いた人やグループが、自分が知った貧困地域のお手伝いを始め、その輪が広がっていく。そして、世界の中から少しずつでも貧困が減少していく。私たちはそう信じて今日も活動している。